

## 第4回西予市中学校再編検討委員会グループワークまとめ

## 【パート1】子どもたちへの願い

○子どもたちに身に付けてほしいもの

○どんな子どもに育ってほしいか など

グループ① 子どもたちに「たくましく、世の中を生き抜く力を身につけてほしい」という意見が大筋で一致。そのためには、人間関係、つまり「人と関わる経験」がとても重要。

いろいろな場面で仲間と関わり合い、切磋琢磨しながら学んでいく中で、必要な力が育つのではないかという意見が共有された。

最近の子どもは自己肯定感が低く、自信が持てない傾向があるという指摘もあった。そうした状況を踏まえ、困難な場面にも逃げずに向き合える、困難に立ち向かう力を身につけてほしいという意見が挙がった。

総じて、「たくましさ」「人との関わり」「自信」「困難への対応力」が、これからの子どもに必要な力として挙げられた。

グループ② 子どもたちには、地域とのつながりを大切にし、助け合う姿勢を身につけてほしいという意見が出た。

きちんと挨拶ができる子どもであってほしいという声も挙がった。

何かトラブルや問題が起きたときに、自分たちで解決しようとする力を育てたい。そのためには互いを認め合いながら協力できる子どもであってほしい、という意見もあった。

多くの人と出会う機会を通して、子ども自身の世界が広がっていくことが大切だという話も出た。

自分の考えをきちんと発言できることが大事であるとの意見が挙がった。

グループ③ 学力はもちろん大切だが、それ以上に「人間力」をしっかり身につけてほしい、という意見が出た。具体的には誰とでもコミュニケーションが取れる力、周りから好かれ、頼られるような人間性、自信を持ちながらも、柔軟に対応できる姿勢、みんなで協力しながら物事に取り組む力、生きる力、つまり社会の中でたくましくやっていける力といった点が挙げられた。

地域を大切に思う郷土愛を育むことや、豊かな想像力をもってほしいという意見も共有された。

グループ④ 人として基本的な言動がきちんとできる子に育ってほしい、という意見が多かった。例えば、ご飯を食べるときにしっかり「いただきます」と言える、といった基本的なマナーを身につけることを大切にしたいという声も挙がった。

人間力の高い児童生徒を育てる必要があるという考えが示された。そのためには、インターネット上の関係だけではなく、生身の人同士で意見

を交わし、コミュニケーションを積み重ねることで、しっかりした人間関係をつくれる環境が大切だという意見が出た。

学校現場については、モンスターペアレントへの対応、勉強についていけない児童生徒への支援時間が不足している状況など、現在の課題も挙げられた。

昼休みに先生が時間を割いて勉強を見ている学校もあるなど、教員の負担は大きいものの、子どもたちのために協力し合う環境が整うと良い、という意見も共有された。

委員長まとめ 文部科学省では2030年に向けた学習指導要領改訂の議論がされている。その中で示されている、「日本の子どもにこんな姿になってほしい」という国の方向性がある。文部科学省が掲げるキーワードとしては、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自分の人生を方向づけられる、民主的で持続可能な社会のつくり手」という理念が示されている。この理念は、今回のグループで出された意見と非常に重なると思う。

具体的には、他者としっかり向き合う力、困難やトラブルに直面したとき、それを乗り越えていく力、実際の「生身の人」と関係を築いていく力、コミュニケーション能力、多様な考えや価値観を持った他者との出会いを経験すること。といった点である。

もう一つのキーワードとして「多様性」がある。「多様性」がこれからの教育の大きなテーマであり、異なる価値観の人と出会えば摩擦や対立が起こるのは当然で、それを避けるのではなく、きちんと向き合いながら周囲がサポートしていく環境づくりが学校に求められている。学力（テストの点）ももちろん大切だが、これからの教育では、多様な他者との協働力や、人間関係をつくる力といった「資質・能力」の育成がより重視されている。

## 【パート2】西予市における望ましい（理想の）教育環境は？

### <ハード面>

グループ① 統合する場合、スクールバスの運行体制をしっかりと整えてほしいという声があった。通学時間の長さも含めて検討が必要ではないかという意見もあった。寮をどうするかという点も話題になった。寮は良い面もあるが、必ずしも全員にとって最適ではないのでは、という意見も含めて様々だった。

統合は1校にまとめるのではなく、2校に分けた方が良いのではないかという案も出た。

グループ② 教室の環境については、フリースペース型ではなく、部屋を区切り、教室として明確に分けた方が良いという意見があった。理由としては、子どもが別のスペースへふらっと移動しすぎるのを防げる。他のクラスの活動を見に行くなど、クラス間の交流がしやすい。クラスマッチなどでクラスとしての団結力が生まれやすいといった点が挙げられた

グループ③ 基本的なことではあるが、安全が確保されている環境が大事という意見があった。その点では、現在の学校は、耐震化は既にできている。全教室に空調が整備されている。といった点で、一定の環境は整っていると感じているという声があった。また、支援が必要な生徒が増えている中で、別室対応ができる環境が整っていること、また今後も整えてほしいという要望も出た。

グループ④ 宇和中学校が統合校になった場合を想定した話として、雨天時の送迎で校舎周辺が渋滞する可能性が指摘され、交通動線の配慮が必要だという意見が出た。また、図書室の充実については、学校規模によって大きく差が出るため、図書室の充実をぜひ図ってほしいという声があった。

委員長まとめ 子どもが安心・安全に過ごせる環境が前提とした上で、安全面・設備面の確保が何より大事。図書室の充実には、読書環境は文字や表現力の育成に直結する。  
読書というのは他者との直接的な対話ではないが、“筆者との対話（資料との対話）”という形の学びでもあり、近年非常に注目されている。そのため、図書室や本屋といった空間は、子どもの読解力育成にとって重要な教育環境である。

## <ソフト面>

- グループ① 教員数は多い方が良いという意見が共有された。教員に余裕があれば子どもへの関わりも細やかになり、結果として良い教育につながるという考えである。
- グループ② リモートを使って海外の人とお互いの地域を紹介し合う授業ができると良いのでは、という意見があった。それによって、子どもたちが自分の地域について学び、発信する機会になる。西予市には山・海・カルストなど紹介できる魅力が多い、海外の相手がいるなら英語の授業としても活用できるといった利点が挙げられた。海外と直接接する機会がほとんどないため、子どもたちはどうしても萎縮しがちだが、リモートでの交流を経験することで緊張もやわらぎ、話すハードルが下がるのではないかという意見もあった。
- グループ③ 特別支援に関するサポート体制の充実が必要という意見が多かった。特に、「生活支援員が廃止されている現状がある」という指摘があり、特別支援・生活支援体制をもう一度強化してほしいという声が出た。
- グループ④ 人間力を育むというテーマから、部活動の充実が大切ではないかという意見があった。子どもたちが人との関わり方を学んだり、協働する力を育む場として部活動の環境整備を求める声があった。
- 委員長まとめ ICT環境の整備により、海外や他地域の子どもたちと交流する授業が可能になっている。多様な他者との対話機会をどう作るかが重要である。また、部活動の充実については、現代社会において“縦の関係”や“礼儀”を学ぶ機会が減っており、特にZ世代は、対立や摩擦を避ける傾向がある。目上の人との接し方を学ぶ機会が少ないといった現状があり、社会に出て困る場面も増えている。こうした状況の中で、異なる世代と関係を築く力を育てる場として、学校教育や部活動の役割は大きい。

## <望ましい1学級の人数>

グループ① 学校側の経験として25人程度が望ましいのではないか、という話があった。少人数の方が学力は伸ばしやすい側面もある。しかし人数が少なすぎると意見の多様性に触れにくくなる。また、教員に余裕がないと小規模校では負担が偏りやすい、という指摘もあった。

グループ③ 1学級の人数は25～30人程度が良いのではないかという意見でまとまった。理由としては、ある程度人数がいる方が、子ども同士で切磋琢磨できる。多様な意見に触れられるといった点が挙げられた。

委員長まとめ 皆さんの発表から総じて、25～30人程度が望ましいのではないかという意見が多かったと整理する。理由としては、多様な意見に触れられる環境であること、互いの意見を聞き合う場をつくりやすいことが挙げられた。

素敵な友だちに出会える場がある、というのがすごく大事だと考える。先生に叱られてシュンとしている子でも、複数の友だちがいれば“ニキニキッ”と元気を取り戻す、そういう姿もある。どんな友だちと出会うか、その機会をどう保証するかも、教育環境を考えるうえで欠かせない視点だと考える。

## <望ましい1学年の学級数>

グループ① 複数学級が望ましいという意見が多かった。理由としては、同じ教科を担当する教員同士で協力や相談ができる。子どもも違うクラスの友達と関われる。といった点が挙げられた。1学年1学級の学校にも良さはあるが、教員配置面から見ると、ある程度規模があった方が良いという話も出た。

グループ② 学級数については、個人的な経験をもとに、1～3年生の学級数はそろえてほしいという意見が出た。過去の例として、3年生だけ5クラス、1・2年生は4クラス。体育祭の際に差が生じ、生徒間でトラブルが起こったことが紹介された。こうした不公平感や混乱を避けるためにも、各学年の学級数をそろえる方が望ましいとの意見であった。

グループ③ クラス数については、2クラス以上あった方が良いという意見が多数だった。1学年1クラスしかない、人間関係が固定されやすく、しんどさが出る場合があるという指摘があった。

- ・ 複数学級があることで、人間関係のリセットが可能。トラブルが起きても別クラスという選択肢があるなど、子どもにとって解決の幅が広がるというメリットが語られた。

グループ④ 小規模校・大規模校それぞれの良さについて話し合われた。小規模校の良さは役割が回りやすく、子ども一人ひとりに活躍の場が与えやすい。大規模校の良さは人数が多いことで人間関係が豊かになり、多様な人と関わる経験が得られる。こうした双方のメリットを踏まえて、学級数のあり方を考えていく必要があるという認識が共有された。

委員長まとめ 皆さんの意見として、複数学級があった方がよいという方向性が見られたと整理する。理由としては、人間関係が固定されすぎない。子どもが多様な関係性の中で成長できるといった利点を確認された。

子どもたちは、これから本当にいろいろな価値観や文化を持つ人と関わることになる。だから、学校の中でも“多様な人と出会う場”を意識的につくっていく必要がある。多様な立場や考え方を理解したり、対話したりできる力がないと、これからのグローバル社会には立ち向かえない。ここは学校として共通認識を持っておくことが大事だと考える。

子どもがどんな先生と出会うか。それが教育にとってもものすごく大事になる。子どもたちが“素敵な先生に出会える機会”をどうやって保証するか。これは教育環境を考える上で欠かせない視点だと考える。

### 【パート3】中学校再編の必要性

グループ① まず「そもそも本当に再編の必要性を話し合う必要があるのか」という意見も出たが、再編を進めるのであれば、アンケート結果を踏まえて、どんなニーズがあって再編が必要だと考えられているのか、その点から議論を始めるべきだという意見があった。

特にアンケートでは「人数が減ってきている」という指摘が多く、そこが再編の理由として大きいのではないかと、という見方が示された。

その上で、「必要だから再編する」という前提に立つなら、ではどのように再編するのが適切かを議論していくべきだという意見が出た。

教育環境も重視すべきという声があり、例えばスクールバス通学の時間が長くなることへの懸念や、必要最低限の教育環境が確保できるのであれば、まずは学校を2つにするなどの選択肢もあり得るのではないかと、という考えも示された。

さらに、短期だけでなく長期的な視点でも、将来的にどんな再編が必要になるのかを考える必要があるのではないかとという意見もあった。

まとめると、「良い教育環境を確保する」という視点を持ちながら再編を進め、そのためにどこを重点的に検討すべきなのか、ある程度指針を示した上で、具体的な議論を行うべきだというのが主な意見であった。

グループ② 再編については、最終的には1校にすべきではないかという意見が多かった。

まずは当面「2校体制」を維持するにしても、数年後には生徒数の減少やクラス数の縮小を考えると、最終的には1校にまとめる方向で考えるべきではないか、という声があった。

一方で、距離の問題も指摘された。特に城川地区などからは学校までの距離が長くなりすぎ、通学時間が過度にかかるのではないかと懸念が出された。そのため、もし1校にするのであれば、通学負担を軽減するための宿舍の整備が必要ではないかという意見もあった。

また、1校化に伴う「地域のつながりの希薄化」を心配する声もあったが、生徒数の推移を見据えると、長期的には1校化を前提に考える必要があるのではないかと意見が多かった。

グループ③ 再編の必要性については、今日の一連のワークを通して、子どもたちの教育環境を考えると再編は必要であり、やむを得ないのではないかと意見があった。

一方で、実際に再編を進めるとなると、地域への影響を考えると迷いが生じるというのも正直なところではないか、という声もあった。ただし、再編を行うのであれば、「なぜ再編が必要なのか」「子どもたちのためにどのような意義があるのか」といった点について、しっかり説明していく責任があるという意見が出た。

単に「子どもが少なくなるから再編する」のではなく、子どもたちの学びや成長のために再編が必要であることを、地域に丁寧に伝えていく必要があるという考えが示された。

グループ④ 中学校の再編の必要性については、今回の議論では特に深くは話し合われなかった。ただし、生徒数が大きく減少しており、今後増える見込みもない現状を踏まえると、再編はやむを得ないのではないかという意見が出た。

また、「2校体制にするのか、1校にするのか」という点については、参加者の中でも意見が分かれた。「1校にすべきだ」という意見がある一方で、議論には明確に表れていないものの、2校維持という考え方も一定数あるのではないかという雰囲気もあり、どちらかに意見がまとまる状況ではなかった。

委員長まとめ 議論の中で重要な論点として挙げたのは、「そもそもなぜ再編が必要なのか」という点である。パート1、パート2で出された意見を踏まえると、再編は「適切な教育環境をつくるため」に検討されているという認識が共有されていた。

では、その“適切な教育環境”とは何かという点については、多様な他者との出会いや、多様な学びを保障できることが重要であり、その観点から再編を前向きに検討する必要があるのではないか、という意見があった。

一方で、再編に伴う課題として、登下校の負担、地域とのつながりの希薄化といった懸念も示された。こうした心配はあるものの、総じてみれば、参加者の多くが再編の必要だとの意見であった。